

中川根ふる里通信

= 第29号 =

編集・発行・モアアワ中川根
 連絡先 〒428-003
 静岡県榛原郡中川根町上尾
 ふる里通信係 857-6
 郵便振替
 口座〈名目〉7-81556



千葉山智満寺所蔵
 涅槃像図

P10~11 「ふるさと夜話」
 をご覧下さい。

写真提供 諸田秀男さん



中川根の入口

地名トンネル新装

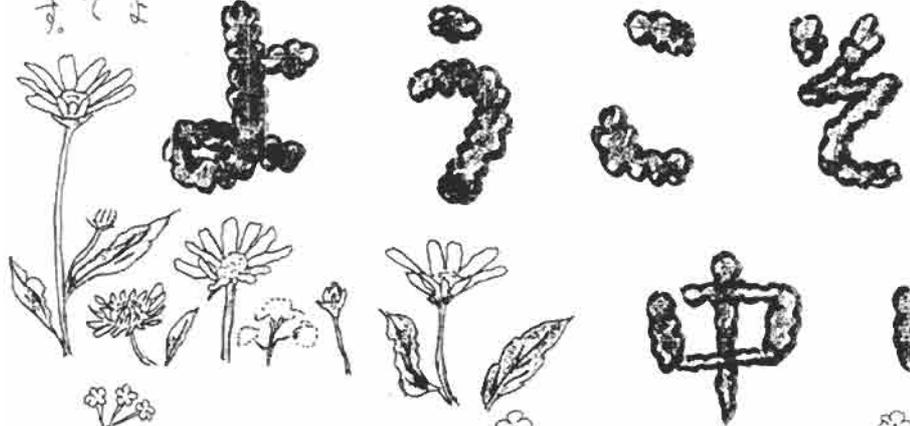
中川根への関門。地名トンネルが新しくなりました。車でいらつしやう。方なら皆さん思ったことではない。内部ですれちがいの来ない、暗い、恐いトンネル。その先に何があるの……

春秋の行楽時、帰省時の渋滞。五十分は覚悟されたと思いますが、茶娘と鹿ノ舞がお迎えする新しいトンネルは二十秒たらずで「サー」と風の様に通りぬけて行きます。

りぬけて行き、これで中川根のイメージも少くなく、良くなると思えます。道路もすい分はくはなっておりす。



中川根



地名峠から、塩郷にかけての道路も、広くなっています。その間、中電土捨場が、さつきの木で、上の様な歓迎文子が植込まれて、五月下旬から濃ピンクの花が咲いて、とてもきれいです。

その周囲には、草花の壁が広く続き、春夏秋と様々な花が咲きます。

このころ、マリンゴールドやヒナゲシ、ハルシヤギクなど、特にヒナゲシの可憐な花が目立ちます。

大井川に目を転じますと、河原の所々に、濃いピンクの色が見られます。ムシトリナデシコの群生です。中川根は、ダムによる堆砂を取っているため、河原全体とは行きませんが、国道一号线橋上流（島田市大長と金谷町五和付近）の河原全体がピンクのシヨウタンを敷きつめた様です。昨年は大洪水も魚かっただけ、根付きが良かったようです。



六月一日、大井川の鮎釣りが始まりました。ことしは、魚の数が少なめだとの話も聞かれます。その分、魚が大きいとの事ですが……

塩郷堤にて、上下流の魚の交流が断ち切られていた為（常時）川の生態もくすねがちな状態です。近いうちに、魚道が作られる様です。五トンの放水+魚道用水が、下流に流れるといいですね。

キャンプ場紹介

「水と緑とふれあいの町」のキャッチフレーズの
 中川根町、素朴なキャンプ場が四ヶ所設置されています。
 ゴールデンウィークには大変な賑わいでした。
 紹介致します。(下図 番号参考に)

①くのわき親水公園キャンプ場

久野脇地区の南側で大井川は大きく蛇行します。川に向っ
 て突堤が伸びていて、広い河原が、キャンプ場に利用されて
 います。管理棟、水洗トイレ、炊事場、シャワー室など完備され
 ています。収容人員でロロ人、利用料金一人三〇〇円
 ゴールデンウィークには、一〇〇〇人以上の人が(一日)キャ
 ンプをとり、とてもにぎやかでした。



この特徴は、柳の木が
 生い茂り、暑さから守って
 くれる事、つり橋や、薬師
 堂ハイキングコースがある事、
 広い河原と水遊び、など
 です。又、キャンプ場の一角
 には、ほし飼いのわとり
 がいて、新鮮なたまごを
 ふれあいが出来ます。
 県内はもちろん、県外から
 訪れてきます。

連絡先
 TEL. 0547-56-1002



②中川根自然キャンプ村

大井川鉄道、塩郷駅より、三〇〇Mほど
 北上すると、塩郷堰堤があり、その上側
 段丘に、自然キャンプ村があります。

バンガロー、収容人員一ニ〇〇人、テントニ〇〇人
 と、親水公園に比べると、小規模ですが、施設も
 完備されていて、シーズンを通し、土、日曜日及び
 夏休みには、満席の利用となります。ダム岸辺
 水遊びや、つり橋、ハイキングコースもあります。
 足を伸ばして、久野脇発電所方面の散策もいか
 がでよう。他のキャンプ場が、車が主体となつて
 いるのに対し、駅から歩いて、数分と、電車を利
 用しても行けます。



問い合わせ先
 * TEL. 0547-56-0231
 (中川根町商工会内)
 * キャンプ場管理棟
 TEL. 0547-56-1408



③ 不動の滝オートキャンプ場

下泉本村に入る手前の川は河内川です。川添いに、貸別荘や、ログハウスなどがあり、町内に於ては、開発の進んだ地区です。

支流に小河内川があり、車で下泉から十分ならずで、不動の滝オートキャンプ場に着きます。木々に囲まれ、小鳥のさえずりが聞かれ、谷には清流がけり、とてもステキな所です。

五月三日に訪れてみました。テントは四五十張、子供達は飛びまわり、大変なにぎわいでした。

ここは、アウトドアスポーツ冊子等に紹介されたこともあり、県外ナンバーの車も多く、特に関東方面が目に付きました。



昨年までは無料でした。施設も整備されていて、我が町が町外の皆さんへのサービスの一つですが、今年からは、管理棟も出来、入場料も必要になったとの事です。人里とはなれている所ですので、常時清潔な環境を提供すま為にも必要な事かも知れません。歩いて十分ほどすると、不動の滝があり、散策にも、森林浴にも最高ですが、カー心配事は、有名になりすぎて、夏休みなど、キャンプ場に入れなくて、河内川添いにテントと寝るキャンパーの姿が大勢見受けられます。夕立ちなどでも増水し、危険なところですよ。

④ 三ツ星オートキャンプ場

高郷、長尾川をさし上ると、中学校、忠靈塔など、建つ物があり、第一堰堤上部が、改良されて、オートキャンプ場として、六月五日オープンしました。長尾川の水源は、三ツ星山で、当地から、美しい山姿が望めます。周辺も除々に整備される計画があります。二十四区画、電気も利用出来る計画が、川のせせらぎ、昆虫、小鳥など、自然にも恵まれた、いい所です。この夏、皆さんのいらっしやるのを楽しみみにしていると、ころです。代金は一区画二五〇円です。



不動の滝及び三ツ星オートキャンプ場に関する問い合わせは、中川根町役場 産業課

TEL. 0547-56-1111 です。

あのころ……

昭和三十九年

水川農研に

栄えの天皇杯

水川農事研究会が、十一月、

全国農業祭の農産部門で

天皇杯を受賞、お茶づくり日本

一の栄冠を得られました。昭和二十一年、同農研発足以来、

大井会長ら二十五人の会員が一致協力、茶の品質改善に努力

してきたもので、二十年に及ぶ会員の努力と、たゆまぬ研究の

結果が、この最高の栄誉となって輝いたものです。

広報 中川根より

大井準之助さんのお話



県庁を振り出しに、静岡、掛川間を
折り返し、現、農協五和支店（前、キ

タハイ農協本所）まで、砂利道だった国道、県道を砂
煙を巻き上げてのパレードは、第三回全国農業祭に
おいて、水川農事研究会が天皇杯を受賞した事によ
るものであります。

昭和三十九年十一月、お茶では、全国で初めて授与さ
れた天皇杯が、初の静岡県入りし、茶袋のしみこん
だ、ふしくれたった男たちの手によって、晩秋の川根
路を上ったものでした。

まるで、初めて生まれた子供のために、県を始め

一ページに続く



静岡県七間町をパレードする晴れ姿
写真 左より、澤本善一さん 板谷年純さん



傘下の関連諸団体が祝典の屋台ひきを、してくれたようなものでした。

——時、あたかも東京オリンピックの開催、東海道新幹線開通の年でもあった——

このころから上昇の一途をたどった茶業ではありまじく、受賞から四半世紀有餘、会の発足から半世紀になんなんとする歴史の年輪の中で、国民の食生活の変化、競合飲料多様化の波にははまされながらも、先輩同輩が汗みどろで打ち建てた栄光の金字塔を守り抜かねばの執念と、川根茶の名声を保ち続けるため、今では地域活性化を旗印に、町が一体となって茶業の振興を図っています。

(当時の広報なかかわねによれば、大井氏は東京での受賞式の会場において皇太子殿下(現天皇陛下)とお会いし、約十分間お言葉を交わされ、「極度の緊張感と生涯の光栄に浴びた感激をしみじみと味わった」と書かれています。)

この季節 ご紹介したい方

県指定無形文化財 手揉茶技術者 のお二人



名 地 池 秋道氏



名 川 高田一夫氏

高田 一夫 氏 大正四年十月二十二日生

少壮のころから茶業に精励され、川根揉切流創始者、中村光四郎氏の伝習会にて五か年も修行して茶手揉技術も習得し、その練磨向上に努め、昭和五十四年、県手揉茶保存会(川根揉切流)師範に認定されて、五十五年から県茶業試験場、農林短期大学の茶手揉講師として茶業後継者の養成にあたりつづけている。

また、氏は篤農家としても知られ、昭和三十九年中川根町が献上茶謹製を行うに当たっては、指定茶園を引受け、又、全国及び県の品評会には例年本品し、常に上位入賞を賜う取り輝かしい成果をあげ、茶業の振興に積極的な経営と相まって多大な寄与を果してきた。

※全国茶品評会煎茶の部、一等農林大臣賞七回、一等八回、など
滝 秋道 氏 明治四十四年十月九日生

滝氏は志太郡茶業講習会において、青透流の手揉技術を習得し、昭和十四年には県茶試験場の茶手揉補助指導員を勤め、後進の指導に当たり、昭和三十年から川根茶業組合指導員となり、県茶連指導員、農協指導員として二十三年の長きにわたり、比榛原地区内の製茶指導に専念された。

その功績により、昭和四十八年、静岡県知事から、製茶加工技能賞を受け、翌年、杉山彦三郎賞を受賞した。
昭和五十三年、農協職員を退職後、川根手揉保存会会員となり、手揉製茶の指導を担当し、県手揉保存会から師範に認定され、同会理事としても活躍している。

町の文化財改訂版より

東京のかたすみから(2) ☆テレビの始めから終りまで

恩師高柳健次郎先生なくして

私の人生なし 渡邊 賢夫

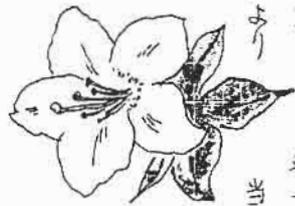


二月の末に友人達と十数名で箱根に旅行した。連絡係として各部屋をのぞいてみると、どの部屋でもテレビがついていて、寝ころんでいる者もいれば、飲んでゐる者もいる。都会からわびく足運んで来て、新鮮な空気を吸って温泉につかっているだけでは、満足出来ないらしい。

こんなテレビ中毒患者ばかりの現在、「テレビ時代は終わった」と宣言した。「何を馬鹿な」と大方の人は先ず反発し、次にいぶかしく思うだろう。又、「四十年近くもテレビの仕事をしていて退職したので、頭が狂ったに違いない。『可哀そうに』と、同情を寄せて下さる優しい読者もきっといるに違いない。

けれどもこれは歴然たる事実なのだ。日本で初めてテレビ電波が発射されたのが東京で、昭和二十八年二月、今年にテレビ開局四十年のお祝いやら特別番組やら、賑やかなイベントが行われているが、何と二十年も以前に「映画百年、テレビ三十年論」を唱えた先輩がいた。テレビの普及で映画館は衰退の一途を辿り、テレビも又、ハイテック時代を迎え、エレクトロニクスの画期的発展により開発されたニューメディアにより、その寿命は著しく縮められたと云えよう。

「画面を通して遠くの物を見る」と云う本来の意味は薄れて、既にビデオソフト(ビデオ映画、ビデオ講座、ビデオ再生やテレビゲーム等)に殆



んどその勢力を授けられたアッパレな現状である。これはハード面での話。

ソフト面では、十年前、昼のショウ番組で大問題を引き起した「やらせ事件」(司会者の川崎敏三氏はめ多くのスタッフが責任をとって辞めた)以来、最近、やらせが多いことと見ても、本来のテレビの使命とはかけ離れている。将に末期症状と云うべきか。

さて、これから私が「テレビの始まりから終りまで」と題して裏話を紹介する前に、テレビの発明者であり、文化勲章を受章された故、高柳健次郎先生について先ず、語らねばならない。

私が先生の一愛弟子であるという理由だけで、テレビ局に入社出来たからである。当時、テレビジョン工学の講座を開いていたのは、大学多しと云えども(今より遙かに少なかったが)静大工学部のみであり、高柳教授がその講座の生みの親であった。私は昭和三十年三月、静大工学部電気工学科を卒業すると同時にSBSの大石社長(すでに故人、当時新聞界の三傑の一人と云われ、静岡新聞の社長でもあった)に囑望されてテレビ技術の要員として入社した。そして静岡県域へも民放初電波を発射する為に、テレビ局建設の基礎設計が行われ、私も三十二年十二月迄これに参加した。

当時のテレビ放送は白黒のみで、将来カラーテレビ時代の到来が予測された。昔から東京は、青雲の志を抱いて若者達の集まる都会である。私も又、最先端の技術を身につけて、東京の検舞台で活躍したいと願う気持ちが強かった。思えば血気盛んな青春時代であった。

ついにその野望絶ちがたく、巴の力を試みてみたい衝動にかられて、そしてその為にはもう少し基礎理論を勉強する必要があると考え、BBSを退社し、一旦母校の研究室に戻った。カラーテレビに関する講義を無料で受けてよいと担当教授から許可がおりた時はまさに欣喜雀躍した。志の高さに反して、一銭の貯えもない若者であった。

半年間の勉強の後、昭和三十三年上京して、今度はテレビ朝日の前身である日本教育テレビの創立に参加したが、この時も入社に際して高柳先生の愛弟子ということでは無条件の信頼を得た。入社試験は面接のみで、(会社はじまうて以来、後にも前にもパーテスト画しは私だけではないだろうかと)肺浸潤の痕跡のみえるレントゲン写真を見ながら、「東京の空気を吸ってまじめに仕事をすれば治るだろう」と面接試験官の社長赤尾好夫氏。隣で会長の大川博氏が「こやか」に頷いた。

肺の異常は、当時最も怖れられていた病であり、それが原因で不合格という苦い水を飲まされた不幸な人達が沢山いた時代であった。にも拘らず偉大な高柳教授という看板のおかげで、(本人はそれを誇示する気持は全く無かったが)かくして大きな顔で会社の門をくぐり、爾来三十数年をテレビ局で過ごしたのである。

あの時、人並みにパーパーテストを受けていたら、その後のテレビ局生活は恐らく画のつたであらう。決して有能な学生ではなかつた自信をもって、広言出来る。虎屋のヨーカンとか追分、タンゴとか看板で売れている菓子よりも、上長尾の光林堂の茶ヨーカンや、四季の空の餅菓子の方が、何十倍



も美味いという事実と同じく、かの堂雪時代で著名な旺文社の赤尾好夫氏や、東映映画で名高い大川博氏ですら、やはり看板には弱かつたということがあるだろうか。二人共すでに他界されて聞かずとも悪いが……

東京でのテレビ関係の会議(NHKはじめ各社より集まる)では、出席者のほとんどが浜松(静大工学部)出身者である。という時期が永く続き、浜松出身者というだけでテレビに関しては特別扱いされ、又どこへ行っても先輩達がいって苦勞しなかつた。給料も人並みにもうえたく、そんなわけで放送局にいる間、特に勉強もせず怠情に過してつたのも、余りにも偉い恩師のおかげであった。思えばまことに不肖の弟子である。

先生の生き方を如実に表わしているお言葉に、「求むる心、他人に求むるより己に求めよ」とあるが、私もこれを肝に銘じて、これからも生きる上での姿勢としていと思っている。一九九三年三月十日 記

余録

高柳健次郎氏について

一八九九(明治三二)〜一九九〇(平成二)。テレビ技術の研究開拓者。長上郡和田村(浜松市安新町)に生まれる。静岡師範を経て一九二二年(大正一〇)東京高等工業学校(東京工大)附設教員養成所を卒業。一九二四年浜松高等工業学校(静岡大学工学部)助教となり、テレビジョンの研究を開始、うち教授となる。

当時、機械的走査機のテレビが研究されていたが、テレビの将来を考えて全電子的な方式を目標に研究



を進めた。世界に先んじて受像には、ブラウン管を改良して使用し、送像は機械的走査で、一九二六年「イ」の字を送る実験に成功。鋭意受像用ブラウン管の研究に努め、多くの発見改良を行い、

一九三〇年(昭和五)のテレビ実験は天覧を受けた。まことに、電子的送像法の基礎となる重要な蓄積方式送像法を發明した。一九三五年に蓄積方式の原理を具体化した、アイコノスコープの試作を、米国に次いで成功。今日のようなテレビの第一歩が実現した。

一九四〇年の東京オリンピック開催が決定し、テレビ放送開始の機運が高まり、NHKは浜松高工の研究を採用、NHK技研に移り、実験放送を始めるに至ったが、戦争で中断。戦後、テレビ研究を再開し、テレビジョン学会を創立、テレビ放送開始に尽力した。

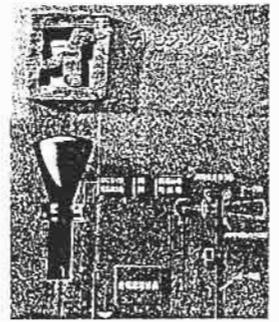
一九六一年(テレビ(国際電気通信連合)第一回世界テレビ祭で表彰されたのはじめ、一九八一年、文化勲章受章。一九八七年浜松市名誉市民、一九八八年米國SMPTE(映画テレビ技術者協会)名誉会員、同年、静岡大学名誉博士、一九八九年勲一等瑞宝章を受章、その他多くの功績章、表彰を受ける。日本ビクター(株)前副社長。

静岡新聞社出版局編集

静岡県歴史人物事典より



シロヤシオ



浜松市立高工にあるテレビジョン発祥の地の記念碑

5月30日(日)
第2回 関東地区
『中川根会』

ふる里のお茶で楽しみませんか！
という事で、下長尾本身、品川区にお住いの中野唯司さんの計画された、『中川根会』の行なわれました。私も本席させていただきました。皆さんの“気”をいただいたてまいりました。中川根の様子を撮影した、ビデオテープも大変好評で、よかったです。約3時間があっという間に過ぎてしまいました。又の期会を、期待いたします。



集い来たれり。20人象 敬者略

ふるさと夜話

原田耕作

智満寺の涅槃像と三津間渡の酒屋

上長尾の智満寺で、毎年二月十五日に、お釈迦様の涅槃会が行われる。その節公開される涅槃像を拝観された人々は随分多いと思う。

涅槃像は大きな掛軸で俗に中四米、長さ八米と言われる。京都の仏絵師、菊沼文助の筆に成るもので、二百余年前、天明五年(一七八五)旧中山根村が遠江国山香左と言われた時代、久野脇村三津間渡の藤田勝典と云う者が、両親供養のため、智満寺に寄進したものと伝えられている。

土地の名の尻に渡が付く所は、すべて川の流れが落ち合う土地で、三津間渡も境川が大井川と落ち合う所である。境川を合んで、平谷の集落と向き合っている土地である。三津間渡は土地の者はミツモドと呼んで居て、三津間の一帯であるが、本村三津間とは、およそかけ離れて山の反対側にある土地である。

現在の三津間渡は三戸であるが、明治の初年までは酒の醸造を業とした。所謂造り酒屋と言われた藤田家という資産家が一户あっただけで、藤田勝典はこの家の主人だった。



智満寺に涅槃像を寄進した勝典は、それ以前、天明三年九月、如何なる祈願のためか、不動明王の石仏を三津間地内に建立して居る。場所は三津間の南部、ツトテ沢の水が塩郷ダムに注ぎ



込む手前の小山の上に鎮座して居る。天明という年は、江戸時代の三大飢饉と言われた、享保、天明、天保の内の大飢饉の年であったから、不動明王の建立を飢饉に結び付ける説もあるが、口伝も記録も無いから真相は全く判らぬ。

現在島田中に、藤田酒屋の末裔である藤田典男氏(大正五年生)が健在であるが、同氏は早くから自家の先祖である三津間渡の藤田酒屋に付て、誠べられて居るが、歴然としなさいと言われて居る。

同氏の説に依ると、藤田酒屋の先祖は、元上長尾に住み、後に高郷に移住、昭和五十年頃静岡市へ転住した同姓の藤田家であると言うが、分かれて、一つの頃三津間渡へ住む様になつたか、また一つの頃酒の醸造を始めたのか、何分にも二百有年前の事である上に、口伝も文献も残って居ないから全く判らぬと言ふ。

然し藤田典男氏自身は、勝典以来七代目に当る事が判つたと言われるが、地元瀬平、三津間に伝えられて居る奥録と口伝は、氏の調査と合致しない不審な点がある。

瀬平平谷の大先達、村松嘉蔵(弘化二年生、明治四十二年、六十五歳死去)が書き遺した自分史に依ると、少年時代三ヶ年、青年時代三ヶ年、併せて六ヶ年三津間渡の藤田勝次郎について、読書と高法を學んだと書いてある。

また、藤田酒屋の末斯には、権六という者があって、仕事で誤つて境川の澗に落ちて死亡、権六澗という澗の名が残っている。権六に跡取りが無いため、弟の兼平に跡を継がせた。兼平は俄成金になつて遊ぶ事を覚え、江戸の吉原で一萬兩で大門締めをして家廻したとか、伊勢の



の古中で花魁の総揚げをしたとか、いろいろ話が伝えられている。然しこの人達が藤田酒屋の何代目に当る人物であるか判っていない。

筆者の近辺に、元藤田酒屋の番頭であった男が住んで居たことがあって、その男が折々伊勢の古市の豪遊について、自慢話をした事があるから、藤田酒屋は遊興に依って身代を傾けたことは事実であったと思う。また当時、こんな噂が噂われたと、古老の話がある。

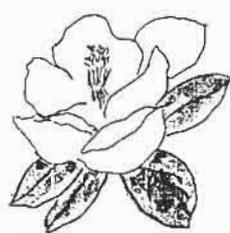
『酒は泉酒、踊り子は音次、酔くて吞まれん三津間渡酒』
何んの事やら判らない噂であるが、酔くて吞まれんと言うからには、酒造りに失敗した様子が判る。

泉酒とは、一丁泉勝山本家の酒で、造り酒屋は、上長尾田野口等各地にあった。酒に銘柄は無く、その土地の酒即ち地酒で、泉酒、上長尾酒等、その土地の名が酒の石であった。

三津間渡最後の酒造家藤田兼平は、いつ頃三津間渡を去ったか詳かでないが、明治十三年に静岡中で世を去った事は事実である。

三津間渡から酒屋が消えて約二十年後、明治二十九年、藤枝田中藩の武士であった山田益六が移住して来た。神陰流の使い手であった益六は、華やかな軍国時代を迎えて、剣術の師として、各地で歓迎されたと言ふ。次で荒間家が移住、後に山下家が移り住んで第二の三津

間渡ができたのだった。



山下家の裏の茶園の中に十二基の墓石が建って居る。藤田酒屋歴代の墓であるが、苔に包まれ文字の判読も出来ない墓石からは昔の何事と傳ふことも

出来ない。

荒間家の屋敷の高い石垣は酒屋の繁栄の昔を語り、屋敷裏の箱筒神社跡に荒間家で建てた赤い鳥居が藤田酒屋の昔を思はせて居る。山田家の庭のすみみの巨木は、往年の酒屋の陰居所を物語って居る。

藤田酒屋繁栄時代には、境川の豊富な水を取入れて、ニヘクタールの水田を作り、その米で酒を造ったという。裏山は藪蒼とした自然林で現代では考えられない程の豊かな水が湧き出て、その水が酒造りに使われたと言ふ。境川はダムに依って、ダイガラホッチの小使控も無く、裏山は開拓されて茶園と変った。真に今昔の感深いものがある。

最後に話を智満寺の涅槃像に戻すことにする。お釈迦様の世を去られる時、嘆き悲しまない生物は無かつたと言ふのに、なぜか猫だけ泣かなかつたと言ふ。その為には猫は十二支の仲間に入れなかつたと言ふ。然しお寺では、どこでも猫を可愛がる様子だが、これは如何なるわけか、チョッピリ不思議に思いつつ、筆を置くことにする。 第二話 終

写真下、境川にかかる橋あり、三津間渡三軒の一部を写す、中心付近に、藤田家の古い墓がある。



定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 〒共 150円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回(季刊誌)の発行を予定しております。今回で購読の切れる方には、郵便振替用紙を同封致しますから引き続き、ご購読をお願いします。年間予約600円のご送金とおすすめします。3年間分位もお受けしています。住所変更のりも、是非ご連絡下さい。



新茶のシーズンも、大変おくれました。例年ゴールデンウィークは地元は茶摘みの最中ですが、今年は五月十日以後にずれ込んでしまいました。わでもおくても変わらなかつた。とも聞きます。収穫量はやや不良とも言われています。

花冷えの四月でした。徳山桃も咲き、高郷大井川堤防の桜も美しく咲き、しかも長く咲いていました。けれども南赤石林道沿いに、植えられている桜はいつになっても咲きません。心配はなして見て来ましたが、葉桜となつていきなにか、それにしては花数がなくまぼらな様子。聞くところによると、小鳥がついばんでしまった(ハウソク)様です。

払込通知票

口座番号 名古屋<7>-81556

加入者名 中川根ふる里通信係

ふる里通信に因する問い合わせ先、及

発行責任者

428-03 静岡県榛原郡中川根町上長尾557-6

小沢節子

TEL. 0547-56-0015



水川地区 崇徳橋付近に 中川根の産業の夢をなくした「フォーレ・中川根・茶若館」が今年度中に出来そうです。主にお茶の振興と聞いています。博物館(資料館)に「ふるのか」販売所なののは、より判りませんが、様子と又載せていきたいと思えます。

九ページにも載せましたが、関東地区、中川根会が催されました。本日は、お茶に付いてのセミナー。を計画されていたのですが、前記のとおりふる里は、茶時にて忙しい最中という事で、残念でした。私も参加させていた。皆様のおふる里を想う熱い心に接する事が出来た。「いつそう精進」なだけはいけな——と考えておきます。夏の号は七月下旬には発行します。

ふる里創生の夢をのせて

梅島下 温泉試験現場



中川根にも温泉脈があった様だ。梅島下、大井川付近に有力なところがあるとの調査結果から、昨年末より試験を始める。すでに終了。成分などの結果待ちとの事です。温泉が湧いたら、どう変わるかな？

楽しみですね。